

芸術作品における真理の問題

瀧 将之（東京大学）

『芸術作品の根源』は、ハイデガーの数ある著作の中でも、これまで読まれ、また論じられることの多かった作品である。その理由としては、ゴッホの靴の絵に代表される、具体的な芸術作品についての叙述や簡潔で魅力的なテーゼが随所に見られることが挙げられるだろう。

とはいえ、「芸術は真理を作品のうちへと打ち立てることである」(GA5 65)というこの著作の核となっているテーゼについては、これまで主題的に考究されることはあまりなかったように思われる（デリダの『絵画における真理』もしかり）。このテーゼが核心にある限り、『芸術作品の根源』はまずもって真理の問題の観点から理解され解釈されねばならないだろう。この著作の本文中で『存在と時間』において真理の問題を扱った箇所を参照するようハイデガー自身が求めている(vgl. GA5 49)ことから、そのことは明らかだろう。

『存在と時間』の真理論では、言明における真から存在者の自己呈示へ、さらに存在者の自己呈示を可能にする世界の開示性へと、真理現象の根拠づけの連関が解明されていた。『芸術作品の根源』でも、ゴッホの靴の絵をもとに世界の信頼性が論じられ、この絵画が農婦の靴をその真なる有様において描いたものである（存在者の自己呈示）ことが明らかにされる。だが、芸術作品論において世界は新たに大地との闘争という観点から論じ直される。だが、ここで言われる大地とは何か。

この著作で「大地とは本質的にみずからを閉ざすものである」とされるが、こうした言明でもってハイデガーは、芸術作品においてとりわけ際立つ、「物」のもつ存在感（輝き、響き、手ごたえなど）を捉えようとしていると考えられる。作品がもつ物としての側面については、しかしひとりハイデガーだけが捉えようとしたのではない。たとえば、戦後日本の美術において〈もの〉派と呼ばれた作家たち（「石を、紙を、鉄板を、あるいはそれらの組み合わせを、ほとんど手を加えることなく、いわば、ただそれだけの〈もの〉としてならべ置いた」¹などと言われる）もまた、彼らなりの仕方でもつ存在感について、実際に作品を制作することによって肉薄しようとしていたと考えられる。

だが、こうした〈もの〉派の作品のうちには、大地の対蹠者である世界についてのなんらかの洞察（あるいは希求と言うべきか）もまた含まれているように思われる。ハイデガーにとって世界とは「そのつどすでにつねに、私が他者たちとともに分かち合っている」(SZ 118)ものとして、公共的な世界（共世界）であった。こうした世界は、ハイデガーにとってはしかしまた歴史的な世界でもあって、『芸術作品の根源』では、樹立としての「芸術が歴史を根拠づける」(GA5 65)のであり、芸術作品とともに「新たな本質的な世界が突如すがたを現した」(ebd.)ことが、古代ギリシア、中世、近代へと展開したヨーロッパの歴史の変遷

¹ 『美術手帖』（美術出版社、1970年2月号）、34頁。

に即して論じられていた。このように述べることでハイデガーは、芸術作品によって私たちの生きる共世界が新たに編成し直され、歴史の時代が画されてきたことを指摘している。

何らかの芸術作品によって、またそれとともに特定の歴史的な時代が始まること。このことを論じた箇所、ハイデガーは改めて「芸術は真理を作品のうちへと打ち立てることである」という、この著作の核心にあるテーゼに言及する。そこでは、「芸術は、作品のうちで存在者の真理を発現させる」(ebd.)などとされるが、しかし『芸術作品の根源』で論じられる真理とは、後記によれば「存在の真理」(GA5 69)のはずである。

芸術作品における「存在の真理」の問題を理解するためには、むしろ古代ギリシアのアレータイアーを参照しながら真理を「非秘匿性」として解釈し、それを秘匿性および通常の意味での真の対向者である偽との相互対立において捉えた箇所を見るべきである。ここでは、非秘匿性とこの二つの非－真理（非－非秘匿性）との対立は、すでに述べた世界と大地との間の闘争からは区別して「原闘争」(GA5 48)と呼ばれている。

ここで1930年代中頃にハイデガーが展開した「存在の真理」論を参照するならば、存在の真理が秘匿性において積極的に論究されているらしいことが分かる。また、存在（有）については、『哲学への寄与論稿』で「死は有の最高の証し〔である〕」(GA65 230)とも言われていた。だとするならば、『存在と時間』において「実存の真理」(SZ 221)とされた現存在の本来性を、ここで再び、今度は『芸術作品の根源』に即して読み直すことができるのではないか。死の問題から、「芸術の由来と思索の使命」について考えることを試みたい。